

# 江戸時代の紀行文（1）～「宇佐詣記」～

コロナ禍の影響で旅行をするものが憚られる昨今ですが、そもそも旅行が庶民の娯楽として定着したのは江戸時代のことといわれています。福岡教育大学名誉教授の板坂耀子さんによると、江戸時代に書かれた紀行文は現在、2千500点ほど残っており、書名などからそのうち60点あまりが九州にかかるものではないか、とされています。また、九州の紀行文によく登場するのは、長崎と太宰府で、この二カ所については丁寧で詳細な記述がなされていることも指摘されています。

こうした紀行文のひとつに「宇佐詣記」があります。平戸藩士奥島景就の手によるもので、書名のとおり、宇佐宮参詣を目的とした旅行の記録です。文政2（1819）年9月11日に出立、従僕平次郎を従えて二人旅で、10月7日に家に帰りつきましたが記されています。

平戸から武雄・佐賀・久留米・日田を経て宇佐に入り、無事、宇佐宮参詣を済ませます。その後、求菩提山・彦山に登り、秋月を通り、9月25日、「武藏の湯町」（二日市温泉）にたどり着き、温泉に入りました。翌26日、天拝山に登り、ふたたび湯町に向かいます。この日はあいにくの

雨だったことから、とりあえず「鳥居の前なる大津屋」にとどまりますが、その雨も夕方にはやんだので、「観世音寺・戒壇院・都府楼の跡」を訪れ、その時の様子を記しています。



この「宇佐詣記」については、「年報太宰府学」第8号（2014年刊）に、全文の翻刻とすべての挿絵を載していますので、ぜひご覧ください。

この「宇佐詣記」については、「年報太宰府学」第8号（2014年刊）に、全文の翻刻とすべての挿絵を載していますので、ぜひご覧ください。